

ウクライナ民族主義の現状

——スヴォボーダとコサック団体の事例を中心に——

岡 部 芳 彦*

1 はじめに

2013年末から始まったユーロ・マイダン、14年2月のヤヌコーヴィチ政権の崩壊に始まるウクライナ危機の間、ロシア政府ならびにマスメディアは一貫して「キエフの政権は、右派セクターや極右政党スヴォボーダ（自由）が支えるファシスト政権」と主張し、現在に至っている。一方、2015年4月には、東ウクライナにおける対テロ作戦 *Антитерористична операція*（以下 АТО）に参加する右派セクター部隊をウクライナ国防省管理下に置くかの攻防があり、ポロシェンコ政権との関係は良好とは言えない⁽¹⁾。また、2014年10月26日のウクライナ最高会議選挙において、スヴォボーダは5%条項を超えることができず、比例代表選出の議席を全て失い、小選挙区の7議席のみと大敗した。

にもかかわらず、現在でもロシア政府や関係者、マスメディアは総じて極右

*本稿は、第26回西日本ロシア東欧研究者集会（於：西南学院大学）における報告「コサック復活運動とウクライナ民族主義の現在」、ならびにウクライナ研究会第31回定例研究懇談会（於：早稲田大学）における報告「ウクライナ民族主義の現状—スヴォボーダとコサック諸団体の事例を中心に—」を起稿したものである。ウクライナ研究会では、石郷岡健氏、伊東孝之氏、大野正美氏、黒川祐二氏、藤森信吉氏（発言順）には有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。（筆者は神戸学院大学経済学部准教授。）

(1) 'В АП говорят, что вопрос о входе ДУК "Правый сектор" в состав ВСУ решен', *Украинская правда*, 29 апреля 2015 (<http://www.pravda.com.ua/rus/news/2015/04/29/7066314/> 2015年6月1日最終閲覧).

ウクライナ民族主義の現状

勢力の政権への影響力の大きさを喧伝している。日本でも同様の論調は多く見られた。一例を挙げれば、佐藤優氏は、スヴォボダの松明行進などの示威行為を取り上げ、「ナチスと同じ傾向」と論じた。⁽²⁾しかし、管見のかぎり、それらの大半が伝聞や映像などを出所とする印象論が多く、実際にスヴォボダ幹部や関係者からの聞き取りやインタビューに基づく議論は皆無であった。またそれらのソースがロシアのマスメディア報道ということも多く、論拠に基づく客観的な判断であったとは到底言えない。

そのような現状を踏まえて、本稿では著者のスヴォボダ関係者からの聞き取りやウクライナにおけるコサック諸団体との交流を経て得た知見をもとに、ウクライナ民族主義を標榜する諸団体の実像を明らかにしたい。なお、本稿が取り扱うのは、現在のウクライナにおけるナショナリズムを掲げるグループの現状分析であり、ウクライナ民族主義の歴史については、本巻のオレクサンドロ・シチの論文に譲りたい。

2 「ウクライナ民族主義」政治勢力の現状—スヴォボダを中心に—

それでは、まずロシア政府が、キエフの政権を「ファシスト政権」と批判してきた根拠の一つであるウクライナ民族主義を掲げる政党スヴォボダの現状について見てみたい。

スヴォボダ Всеукраїнське об'єднання «Свобода» は、1995年設立のウクライナ社会民族党を前身として2004年に結成され、2012年10月のウクライナ最高会議選挙で37議席を得て注目を集めた。とくに西ウクライナで高い支持を得ており、オレーフ・チャフニボーク党首は「2012年、今年の人 Особистістю року」にも選ばれている。⁽³⁾ 彼らの主張は、共産党系政治家および官僚の全員を罷

(2) 佐藤優「佐藤優直伝：インテリジェンスの教室」vol052, 2015年1月7日配信。

(3) ‘Тягнібок став Особистістю року за версією журналу Корреспондент’, *Корреспондент*, 20 грудня 2012. (<http://ua.korrespondent.net/ukraine/politics/1441638-tyagnibok-stav-osobistystyu-roku-za-versieyu-zhurnalu-korrespondent> 2015年6月17日最終閲覧)。

免、国内身分証明書に「民族」を明記する、徹底したウクライナ化を主張してきた。また、第二次大戦中にソ連やナチスからウクライナ独立のために戦ったステパン・バンデーラを始めとするウクライナ民族主義者を国家の英雄とすべきと主張している。バンデーラに対する評価は、旧ソ連諸国やロシアだけではなく、ウクライナ国内でも批判がある。

2014年5月25日のウクライナの大統領選挙と同時に、キエフ市長選挙などの地方選も多くの地域で実施された。そのうち、キエフ市議会選挙の結果は、当時の与党のユリア・ティモシェンコ党首が率いる「祖国」が前回の2008年の選挙で獲得した32議席から3議席まで落ち込み大敗した。一方クリチコ新市長のウダル党は15議席から73議席と議席を独占した。スヴォボーダは、初めて6議席を獲得した。一方、同時実施のウクライナ大統領選挙では、極右ならびに民族主義政党の支持が低いことも分かった。チャフニボークの得票率は1.16%で、ロシアがキエフで主導権を握っていると主張してきた右派セクターのヤロシュ氏にいたっては0.7%の得票にすぎなかった。

2015年の大統領選挙では国民的な支持を得られなかったチャフニボークだが、2012年の最高会議選挙まで、スヴォボーダの人氣が徐々に伸びていた。スヴォボーダはヤヌコーヴィチ大統領逃亡後の連立政権では5閣僚ポストを確保、当初は国防相ポストも押さえていた。マイダンにおけるヤヌコーヴィチ政権への抗議活動からも分かる通り行動は暴力的だが、2004年の結成時に、前身のウクライナ社会民族党のネオナチ的なルーン文字の党章を変更するなど、⁽⁴⁾その主張は年々ソフト路線へ舵をきっており、それらの施策が支持率上昇の背景にあったと思われる。

それではここからはスヴォボーダの幹部と面会した際の内容と印象から、彼

(4) ウクライナ社会民族党の党章であったヴォルフスアンゲルと呼ばれるルーン文字は、第二次世界大戦中、ナチスドイツの武装親衛隊の第2SS装甲師団「ダス・ライヒ」などの部隊章に使用された。ウクライナの義勇兵部隊のアゾフ大隊でも使用されており、ネオナチ的と米国議会などでも問題視されている。ジョン・コンヤース上院議員 twitter, 2015年6月11日 (<https://twitter.com/repjohnconyers>).

ウクライナ民族主義の現状

らの思考や背景を探ってみたい。ここで取り上げるのはスヴォボーダ党首オレーフ・チャフニボーク、オレクサンドル・シチ副首相、ユリイ・シロチュク最高会議議員（副党首）、オレクサンドル・シェフチェンコ最高会議議員、ユリイ・レフチェンコ・キエフ市議会議員（現最高会議議員）である。⁽⁵⁾ スヴォボーダの国政における序列1，2，3位，最長老議員，地方議会の序列1位である。

（1）オレーフ・チャフニボーク

スヴォボーダ党首オレーフ・チャフニボーク Олег Тягнибок とは2013年3月21日に面会した。面会の提案は先方からあり、国政政党としてG7の一角である日本について知りたいというのが理由であった。

スヴォボーダといえば、2014年3月18日、ウクライナ国営テレビ局 НТКУ の襲撃を実行し、地域党のニコライ・レフチェンコ最高会議議員（当時）の演説中に議場から引きずりだしたイホール・ミロシュニチェンコ最高会議議員（当時）に代表されるように、過激な行動をとるメンバーも多い。一方、チャフニボーク自身は、2時間ほどインタビューを行うことが出来たが、普段の語り口は冷静であるとともに論理的な議論を行う印象を受けた。

チャフニボークとの面会におけるキーワードとしては、ウクライナ語へのこだわり、中国嫌い、日本好きといった点を繰り返し強調していた。また「日本とウクライナはロシア・中国を挟んでおり戦略的パートナーとして協力できる」とも述べ、その是非は別にして、グローバルな視野から大局的な見方も持っている印象を受けた。ウクライナ最高会議では、議場を凝視しつつ「ウクライナに栄光あれ！ Слава Україні！」と述べてから演説をすることで知られるチャフニボークだが、非常にフランクな語り口で話すかと思えば、急に固い表情でウクライナの現状の問題点を指摘し始めるといったことが繰り返された。そこからは、彼を含めてスヴォボーダ自体が過激な民族主義政党から議会制下の右派

(5) 肩書はいずれも面会当時。

政党へ脱皮しつつあるのではないかと強く感じた。なお、このインタビューの様子は、チャフニボークが日本人に会うのは初めてとのことでスヴォボーダ党のウェブサイトにも動画が公開されており、そこから日本に対する強い関心が窺える。⁽⁶⁾

（2）オレクサンドル・シチ

つづいて、ヤヌコーヴィチ政権崩壊後、ウクライナ副首相を務めたオレクサンドル・シチ Олександр Сич である。シチは、イヴァーノ＝フランキーウシク国立オイル・ガス技術大学で歴史学の准教授を務めたのち、イヴァーノ＝フランキーウシク州議会議長を経て2012年より最高会議議員⁽⁷⁾、今回の政変後の2014年2月27日より教育・文化政策担当の副首相に就任した。シチとの出会いは彼がまだ大学教員であった2010年に遡る。政変後の2014年5月24日と9月4日にキエフの首相執務庁舎内の副首相室で、それぞれ3時間ほど会談しインタビューを行った。会談についてはウクライナ政府のポータルサイトで以下のように報じられている。

—オレクサンドル・シチ副首相「農業分野におけるウクライナと日本間の学術的な協力が進展すべきである」：副首相広報課

現在に至るまでヨーロッパにおいてもっとも豊かな穀倉地帯であったウクライナは、グローバルな舞台においても農産業における主導的な役割を果たすあらゆる前提条件が揃っている。

ウクライナのオレクサンドル・シチ副首相は、日本の研究者であり、日本ウクライナ間の経済・文化フォーラムを主催する岡部芳彦氏との会談において発言した。まず、シチ氏は、岡部芳彦氏がウクライナ農業科学アカデミー・アグ

(6) Олег Тягнибок отримав відзнаку від Японії (https://www.youtube.com/watch?v=fB_z5mWhMls 2015年5月15日最終閲覧)。

(7) Сич Олександр, ПЛІАСТ - український скавтинг; издательство: Лілея -НВ; 2012.

ウクライナ民族主義の現状

ロエコロジー・環境マネジメント研究所と神戸学院大学との間における協定の締結の意図があることに歓迎の意を表し、日本とウクライナ間の学術機関の関係構築への全面的な支援を約束した。またこのような科学的経験や知識の協力と交流が、ウクライナ経済の農業部門の発展に貢献することを希望していると述べた。

「ウクライナの国土と自然条件と日本の科学技術の潜在性の組み合わせが、目覚ましい成果を生むだろう」とシチ副首相は述べた。

一方、岡部芳彦氏は、日本がウクライナにとって有望な市場であることを強調した。「ウクライナは、我が国が輸入する農産物の第5位の位置を占めている。我々はウクライナとの協力を強化することを計画しており、近い将来、ウクライナの東西両方の複数の大学と関係を持つ予定である」と岡部芳彦氏は自信を持って述べた。⁽⁸⁾ —

シチの研究者としての専門はウクライナのボーイスカウト組織プラスト Пласт の歴史である。インタビューから受ける彼自身の印象は、非常に穏やかな性格で学者肌であった。この記事とは異なり、経済・政治の話より、ウクライナ語教育やウクライナ民族主義について好んで話した。シチの副首相室では、「金曜日はヴィシュバンカ（ウクライナの民族衣装；著者注）で出勤を」というキャンペーンを行っており、著者がそれを着ていないことを非常に残念がった。スカウト組織のプラストをなぜ研究し始めたのかと問うと、ウクライナ民族主義運動としてのスカウト活動という捉え方で、そこにウクライナ民族主義の原点の一つがあると考えたためであった。

最後に、タラス・シェフチェンコの詩「遺言」の各国語に翻訳された詩集か

(8) ‘Олександр Сич: Від наукової співпраці в агросфері між Україною та Японією виграють обидві держави’, *Урядовий портал*, 04.09.2014. (http://www.kmu.gov.ua/control/uk/publish/article?art_id=247575702&cat_id=244274130 2015年6月1日最終閲覧)。なお、本稿で取り上げる著者に関する記事は、執筆媒体の主張である。実際の会話内容や著者の認識とは若干の相違がある場合が見受けられる。

ら、日本語とウクライナ語で朗読することを提案され、その後インタビューを終えた。⁽⁹⁾ここからもウクライナ民族主義者としての嗜好が窺える。

(3) ユリィ・シロチュク

つづいて、ユリィ・シロチュク Юрій Сиротюк 最高会議議員である。2014年5月末に会ったが、ウクライナ最高会議の国家防衛・安全保障委員会所属で、スヴォボダ副代表であった。会話の内容からロシアに対してかなりの主戦派である印象を受けた。会談の様子は、スヴォボダ公式ウェブサイトでは以下のように報じられている。

—「ユリィ・シロチュクが日本の経済学の教授岡部芳彦⁽⁷⁷⁾と会談」

昨日2014年5月23日、スヴォボダ副代表で、国家防衛・安全保障委員会のメンバーであるユリィ・シロチュクは、経済が専門で、日本においてウクライナを積極的に紹介している岡部芳彦教授⁽⁷⁷⁾と会談した。

岡部芳彦氏は独学でウクライナ語を勉強し、ウクライナ正教会の洗礼を受ける準備をしており、この日はウクライナ刺繍の民族衣装のシャツを着ていた。また経済学者としてウクライナと日本との協力のプログラムを推進している。会談中に、ユリィ・シロチュクは「自分のアイデンティティや伝統を維持するため、ロシアの侵略から身を守らなければならないが厳しい状況である。日本は、ウクライナに対して素晴らしい経済改革の手本だが、それと同時にロシアの帝国主義との闘いにおける日本の経験を学ばねばならない。ロシア軍の軍靴を経験した2国間の協力が大切だ」と述べた。またスヴォボダとして、国家安全保障委員会のメンバーとして、2国間の協力を深めるために、ウクライナと日本の防衛関係者の円卓会議を継続的に開催する準備があるとも述べた。

(9) ““Заповіт” Шевченка українською та японською мовами - Олександр Сич та Йопіхіко Окабе”, (<https://www.youtube.com/watch?v=FIwo8JpGdIY> 2015年6月10日最終閲覧).

ウクライナ民族主義の現状

また、両者は、日本とウクライナの友好の第一歩として、これまで実際に行われた行事のように、日本についてより多くを学び、またウクライナ語を学ぶため日本におけるインターネットリソースを作成する必要性を議論した。

岡部芳彦氏によれば、日本はウクライナとの経済協力に興味を持っているが、そのために明確なルールや情勢が安定する必要があると述べた。

両者は、国家の安全保障と防衛のために近代的な技術を交換することに関心があり、次の9月の訪問の際、岡部氏を招いて国家安全保障に関するフォーラムを計画している。⁽¹⁰⁾ —

上記のように、面会の際、著者がヴィシュバンカを着ていることに強い関心を持ち、9月にウクライナ再訪予定であることを告げると、ウクライナ最高会議内での講演を依頼してきた。題目の指定があり、「ロシア帝国主義に対する日本の2回の闘いの歴史」であった。つまり、日露戦争と大戦末期のソ連軍の侵攻についてである。経歴は、大学卒業後、歴史の教師を目指すが見つからず、『Українське слово』の記者になり、最高会議議員になった。ジャーナリスト出身ということもあり非常に語彙が豊富で、饒舌な印象を受けた。⁽¹¹⁾

シロチュクは典型的な反ロシア主義者で、ロシアに対しての武力闘争を現在でも主張している。ATO 作戦が開始してからは、ウクライナ内務省隷下の特殊警察部隊シーチ大隊の設立に深く関与した。この大隊は、スヴォボーダ党員のみで編成されており、現在ATO 地域に展開中である。⁽¹²⁾

(4) オレクサンドル・シェフチェンコ

オレクサンドル・シェフチェンコ Олександр Шевченко は1937年生まれの最

(10) 'Юрій Сиротюк провів зустріч із японським професором економіки Йошіхіко Окабе', *Прес-служба Всеукраїнського об'єднання "Свобода"*, 23 травня 2014. (<http://www.old.svoboda.org.ua/diyalnist/novyny/050886/> 2015年5月30日最終閲覧).

(11) スヴォボーダのイホール・ミロシュニンチェンコもジャーナリスト出身である。

(12) 正式名称：Батальйон МВС спеціального призначення Січ.

高齢で、第7回召集最高会議におけるスヴォボダ会派の長老といってもよい存在である。また、シェフチェンコはタラス・シェフチェンコ大学の法学教授を兼務しており、スヴォボダのイデオログ的存在であるとともに党内きっての知識人でもある。

シェフチェンコの主催で著者をパネリストとして2014年9月4日にウクライナ最高会議委員会ビルにおいてシンポジウムが開催され、その際に議論した。5月のシロチュクの依頼があったので「日米同盟—ウクライナの可能性—」という題で基調講演を行った。⁽¹³⁾ その内容について、スヴォボダ公式ウェブサイトは以下のように報じている。

—オレクサンドル・シェフチェンコは「日米軍事同盟—ウクライナの可能性—」と題したフォーラムを開催した。

2014年9月3日、神戸学院大学の岡部芳彦准教授の参加をえて、オレクサンドル・シェフチェンコ最高会議議員は「日米軍事同盟—ウクライナの可能性—」と題したフォーラムをウクライナ最高会議内で開催した。

岡部芳彦氏はスヴォボダのオレーフ・チャフニボーク、オレクサンドル・シチ、ユリイ・シロチュクらとこれまで会談した。フォーラム冒頭で岡部氏は、ユーロ・マイダンと東ウクライナで犠牲となった兵士への黙とうから始めた。講演は、前回の訪問後に磨きをかけたウクライナ語で行われた。岡部芳彦氏は日本と米国の軍事同盟の歴史と日本の軍事力の特殊性について語り、日本に安全保障上の危険が迫った場合にアメリカは防衛する義務があり、日本は米国を守る義務はないと述べた。また、この同盟は効果的であり、他方では、日本企業がアメリカとの兵器の共同開発に参加が可能で経済的な効果も見込め、また自然災害が発生した際にアメリカが救援に携わった事例を紹介した。ウクライ

(13) ‘Військовий союз між Японією і США: можливість для України’ - форум за участі Олександра Шевченка та Їошихіко Окабе’, Парламентський телеканал «РАДА» (ウクライナ議会チャンネル), 3 вересня 2014.

ウクライナ民族主義の現状

ナは黒海へのアクセスがよく、隣国は非常に攻撃的であるが、日本も海に囲まれ中国の軍事力の脅威にさらされており、状況は我々のものに非常に類似しているとも述べた。また「軍事同盟がないことが日本とウクライナの唯一の違い」と岡部氏は述べた。

一方、アレクサンドル・シェフチェンコは、日本とウクライナ社会との差異を強調することで討論を始めた。また、直近のウクライナ軍の状況やロシアが兵士のための人間の盾として子どもと女性を用いる手段にたけていることを、アフリカ、アジア、ラテンアメリカの反政府勢力の支援を例として取り上げ、ソ連で開発された戦争理論を説明した。またクリミアで起こったことは、明らかに人道に対する犯罪であり、東ウクライナでは同様のことが現在起っていると述べた。くわえて、社会における唯一の公正な所有権と利益分配について日本の千年の経験に言及した。日本は、ウクライナとは異なり、オリガルヒの存在やオフショア・ファンドを使う人が少ない理由が導きだされた。

アレクサンドル・シェフチェンコが出した結論は利益の分配の公正なシステムを設定する必要がある、タラス・オルシェンコ議員が準備中の革命的な法案についても話した。この法案は、東西ウクライナ選出の議員が賛成票を投じた。米国との協力に関しては、アレクサンドル・シェフチェンコによれば、私たちはそのようなミサイル、宇宙産業などで、協力の大きな可能性を秘めていると述べた。⁽¹⁴⁾ —

記事では省略されているが、日本の土地制度や所有形態に関する質疑が多かった。シェフチェンコからは、国家が成り立つ上で人々が自分たちの土地を、自分たちの国家の領土として如何なる過程をへて共通の認識を持つのか、その際発生する民族の記憶とは何かについて質問を受けた。近著は、『ウクライナ慣

(14) ‘Олександр Шевченко провів форум під назвою “Військовий союз між Японією і США: можливість для України”, (<http://www.svoboda.org.ua/diyalnist/novyny/053567/> 2014年9月6日最終閲覧).

習法—9世紀～19世紀』という題であり、現在のウクライナの国民国家の形成にも関わる問題についての強い関心が窺え、また論理的に思考を行う人物との印象を受けた。

（5）ユリイ・レフチェンコ

ユリイ・レフチェンコ Юрий Левченко は2014年5月25日のキエフ市議会議員選挙で当選、キエフ市議会スヴォボーダ会派代表となった。その後10月に選挙で最高会議議員に小選挙区から立候補、当選を果たした。

レフチェンコは、2013年の著者とチャフニボーク党首との会談に同席しており、会談終了後に英語で会話を持った。当時は議員ではなくチャフニボークの経済担当顧問という肩書であった。レフチェンコはLSE（London School of Economics）を卒業しており、その後、ドイツのマグデブルグ大学大学院を修了している。現在30歳と若く、経済問題には相当な知識がある印象を受けた。

今回、紹介した5人とのインタビューを通じて共通して感じたのが、彼らの主張はともかく、論理的に思考し、話せる人物だということである。少なくともロシアのマスメディアが報じるように狂信的で、イデオロギッシュな人物には見えなかった。シェフチェンコやレフチェンコのように高学歴であるのも特徴である。

ロシア政府やマスメディアの言うようにスヴォボーダがネオナチであるかについて判断する際、スヴォボーダのスポンサーの一人がオリガルヒで全ユダヤ会議議長でもあるプライベート財閥の総帥イホール・コロモイシキーであったことを考慮しなければならない。ユダヤ人であるとともに、政変後はドニエプロペトロフスク州知事に就任した彼自身が「スヴォボーダは中道右派政党」と主

(15) Шевченко О. О., *Звичаєве право України IX-XIX століть*, Київ, 2014.

(16) ‘Коломойський: «Свобода» може стати лідируючою політсилою Центру та Заходу України’, ZN. UA. ([http://dt.ua/POLITICS/kolomoyskiy_svoboda_mozhe_stati_](http://dt.ua/POLITICS/kolomoyskiy_svoboda_mozhe_stati)

ウクライナ民族主義の現状

張していることを考えると、一概にネオナチとは言い切れない。スヴォボーダは右派ポピュリズムという位置づけのほうが正確ではないだろうか。

本章をまとめるにあたって、付け加えておきたいことがある。それは、スヴォボーダの若手職員についてである。ウクライナの若者世代に共通することかもしれないが、スヴォボーダ国際部部長アンドリィ・ボロシンやシチ副首相の首席秘書サラミア・ボブロフスカヤなど出会った限りではあるが、英語を話せる率が高い。これは、スヴォボーダ関係者が、外国人と交流するにあたって、ロシア語を公の場では話さないの、他の外国語を学ぶというオプションをとっているのではないかと考えられる。外国語にも通じているということからも、偏狭な民族主義という批判は当たらないのではないだろうか。

独自路線を歩むスヴォボーダであるが2014年10月25日の最高会議選挙直前の9月6日の政治集会に出席した際に、焦燥感が感じられた。伝統的なウクライナ民族主義の継承者であることを自認しているものの、ウクライナ蜂起軍 Українська повстанська армія, УПА の名誉回復など全面に出しすぎ、主張が古臭いようにも思えた。最高会議に議席を得て以降、「ソフト化路線」をとった結果、より過激な主張をする支持者が満足できず、ユーロ・マイダンを通じて右派セクターへ流れたのではないと思われる。大統領選、キエフ市議会選挙で支持が伸びず、最高会議選挙では得票率5%が超えられず比例代表の議席を全て失った今、新たな政治活動の方向性を決める岐路に立たされている。

3 コサック団体

ウクライナは、歴史的にも、現在でも「ウクライナ」というアイデンティティを維持するための物語を常に探し続けているような面があるように思われる。その一つがコサック神話である。本章では、穏健な保守勢力としてのウクライナのコサック団体の現状を、著者の経験を交えつつ紹介したい。

lidiryuchoyu_politsiloyu_tsentru_ta_zahodu_ukrayini.html 2015年6月7日最終閲覧).

まず、ウクライナ・コサックの歴史的な位置づけを簡単にまとめておきたい。ウクライナの国民的詩人や文学者であるタラス・シェフチェンコ、イヴァン・フランコーは頻繁にウクライナ・コサックを取り上げ、ウクライナの理想の民として描いた。⁽¹⁷⁾ その背景にポーランドならびにハプスブルク帝国の支配下で「ルテニア・ガリチア」と呼ばれていたことから「ウクライナ」という統一国家地域への脱皮を図る目的があったと言われる。また、キエフが脱ポーランド化する際に民族的なアイデンティティが必要となった。そこで、ドニプロ川中下流域にいて、本来西ウクライナには何の関係もないコサックを、東西ウクライナをつなげる「ウクライナ・アイデンティティ」の中心に据える目的が彼らにはあったのではないかと思われる。⁽¹⁸⁾

ソ連崩壊後にロシアと同じようにウクライナでもコサックを名乗る多数の団体が設立された。ソ連崩壊後のロシアにおけるコサック復活運動については、NHKなどメディアで取り上げられることも多い。⁽¹⁹⁾ ロシアにおけるコサック復活運動は、ソ連崩壊後の共産主義の喪失時のロシアのアイデンティティ・クライシスを埋める効果は少なからずあった。プーチン政権下では法整備で、現在は、カデットと呼ばれる軍事学校が義務教育を行うことができるようになった。ソチ・オリンピックの警備にも800人のコサックが補助警官のような立場でオリンピックパークの警備を行い、2月20日は、反プーチンの歌を五輪会場で歌っていた「プッシー・ライオット」を鞭うったというニュースは欧米のマスメディアでも報じられている。⁽²⁰⁾

(17) Тарас Шевченко, *Гайдамаки*, 1844 など。

(18) その背景については、日本語で読めるものとして、光吉淑江、「書評：ヤロスラフ・フリツァーク著『ウクライナ史概略—近代ウクライナ民族の形成—』、『スラブ研究46号』, 1999年が詳しい。

(19) 「よみがえるコサック～ロシア大国主義の先兵たち～」, 1994年8月19日, NHK 放映。「新シルクロード 激動の大地をゆく第4集 荒野に響く声 祖国へ」, 2007年6月24日 NHK 放映。「NHK スペシャル：揺れる大国 プーチンのロシア：プーチンの子どもたち～復活する“軍事大国”～」, 2009年3月23日 NHK 放映。

(20) 'Pussy Riot attacked with whips by Cossack militia at Sochi Olympics', *The*

ウクライナ民族主義の現状

一方、ウクライナの復活コサック組織は現在、200近い団体があると言われており、数だけで見るとロシアよりも遥かに多い。ここまで団体が多い理由としては、コサック団体を国家的に組織化・保護しようという試みが盛んな時期があったことが挙げられる。ユシチェンコ政権は、コサック復活運動に非常に熱心で、コサック諸団体を集めてラーダ（コサックの総会）を開いて、ウクライナ・コサックの統領である名誉ヘーチマンに自らが就任をした。また、コサック団体の組織化・法制化に熱心で、クチマ政権下で策定されたコサック復活プログラムを發展させ、大統領令「ウクライナ・コサック發展プログラム⁽²¹⁾ 2002-05」を承認した。

つづく、ヤヌコーヴィチ大統領は、逆の意味で、コサック復活運動を意識していた。ユシチェンコがコサックの諸団体に手厚かったので、ユシチェンコの大統領令のプログラムを廃止の上、「コサック規制法」の制定を2011年の末に検討した。これは、大統領の側近のテクノクラートで女性議員のルカーシュに「フランス大統領が現代に三銃士の法律を作るようなもの」と言われて、ヤヌコーヴィチも思いとどまった。⁽²²⁾ 2011年12月30日に、大統領令1208号によってユシチェンコ政権下のコサック發展プログラムを停止した。

ウクライナ国家は「分厚い市民社会」を特徴とされると言われるが、現在のコサック諸団体の組織形態もそれに支えられ、その一部を形成している。大半は、市民組織 громадська організація としてウクライナ内務省に登録されている。本稿では、現在のウクライナのコサック団体について、現地での調査を基に 2

Guardian, 19 February 2014. (<http://www.theguardian.com/music/2014/feb/19/pussy-riot-attacked-whips-cossack-milita-sochi-winter-olympics> 2015年6月15日最終閲覧).

(21) НАЦІОНАЛЬНА ПРОГРАМА відродження та розвитку Українського козацтва на 2002-2005 роки (ウクライナ最高会議ウェブサイト; <http://zakon4.rada.gov.ua/laws/show/1092/2001?test=4/UMfPEGznhrPY.ZiCC7y2/HI4CYs80msh8Ie6> 2015年6月13日最終閲覧).

(22) ‘Янукович распустил “казаков Ющенко’, *Новости УНИАН* (<http://www.unian.net/society/589997-yanukovich-raspustil-kazakov-yuschenko.html> 2015年6月20日最終閲覧).

例のケーススタディを行いたい。

（1）ウクライナ登録コサック

まず一つ目はウクライナ登録コサック Українське реєстрове козацтво（以下、URK）である。ウクライナ内務省に登録されており、構成員数は約7万人で、ウクライナのコサック組織では最大である。設立は、クチマによってコサック発展プログラムが策定された2002年、本部は東ウクライナのドネツクである。標語は「愛国主義と精神主義 Духовність і патріотизм」である。

ヘーチマン（統領）は、アナトリー・シェフチェンコ Анатолий Шевченкоで、創設時は、ドネツク国立人工知能大学 Державний університет інформатики і шгучного інтелекту という学生数5000人規模の大学の学長であった。現在はドネツク工科大学に吸収合併されて、後に教授となった。ウクライナ登録コサックは、ウクライナ内務省の許可によって小火器の所持が可能である。また、アゾフ海の海港都市マリウポリ市のギリシャ系ディアスポラやアルメニア系ウクライナ人といった少数民族へ資金を提供し、ウクライナ文化教育を熱心に行っている。

ヘーチマン・シェフチェンコは、もともとはコサック復活運動に熱心だったユシチェンコ大統領支持者だったが、ドネツクがコサックの本部であることから、そこが政治的な地盤であったヤヌコーヴィチとも良好な関係を保っていた。⁽²³⁾しかし、2010年の大統領選挙でユリア・ティモシェンコが有利と見るや急に支持を表明した。選挙後、ヤヌコーヴィチ政権によって報復として大学を閉鎖されるなど、冷遇された。

ヘーチマン・シェフチェンコは、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世、ロシア正教会のアレクシイ2世にも謁見、宗教的にはウクライナ正教会キエフ総主教庁

(23) ドネツク国立人工知能大学は、もともとは単科大学 Інститут であったが、大学 Державний університет に昇格したのはヤヌコーヴィチ首相時である。протокол № 48, підписан міністром освіти В.Г. Кременем, 23 декабря 2003.

ウクライナ民族主義の現状

を支持し、フィラレート総主教から YPK に祝福が与えられている。くわえて、ウクライナのイスラム教徒の代表であるムフティを大学に招き、ヨルダンでもコサックの称号を授与するなど、無宗教型の組織を目指している。この点では、ロシア正教の守護者を自認するロシアのコサック組織とはまったく異なっている。

2013年3月に著者がマリウポリ市のウクライナ登録コサック支部を訪問した際、ウクライナ登録コサックが資金提供してウクライナ文化教育を行っている3つの学校を視察した。最初は11年制学校で低学年の児童が歓迎行事として、日頃練習しているコサック伝統の武道を披露してくれた。次に訪れたギリシャ系ディアスポラの学校訪問では、女性に至るまで教員すべてが登録コサックの制服、子供たちも全員コサックの制服を着用していた。3つ目の視察先である11年制学校でも登録コサックが資金を提供して、ウクライナの伝統文化や舞踊の授業を提供していた。マリウポリの登録コサックのオタマン（支部長：ロシア語ではアタマン）はマリウポリ最大の警備会社の社長であり、現地の実業界における影響力も感じられた。その他に、港湾労働者組合でも組合員がウクライナ登録コサックの制服で出迎え、その後登録コサックが全面的にスポンサーとなっている民族舞踊団を訪問した。最後に視察を行ったのはアルメニア系ウクライナ人の教会を中心としたレストラン・ホテルを備えた複合施設であり、アルメニア系のオーナーはウクライナ登録コサックの少将の階級であった。

以上のように東ウクライナの町では、ウクライナ登録コサックは影響力があるだけでなく、ウクライナ人以外の民族も取り込むことに熱心で、偏狭な民族主義とはまったく異なり、「コサック」でありたい人すべてがメンバーとなる実態が、これらの事例から窺える。

（2）コサック国際アカデミー

続いてコサック国際アカデミー Міжнародна академія козацтва を見てみたい。この団体の本部はキエフにあり、ウクライナ登録コサックのように実働部

隊は持っていない。その目的は、CIS各国のコサック組織の交流である。コサック人民英雄章 *герой козацького народу* という、ソ連邦英雄に模した形の章を毎年、CIS各国の関係者に授与している。主な受章者はウクライナでは2009年にユシチェンコ大統領、2010年にヤヌコーヴィチ大統領、2011年にアザロフ首相、また、2010年にジリノフスキー・ロシア下院国家会議副議長、2013年にゲンナディ・ケルネス・ハルキウ（ハリコフ）市長⁽²⁴⁾、2014年にカザフスタンのナザルバエフ大統領にも授与されている⁽²⁵⁾。

また、このアカデミーは、毎年、『コサックの同志、ウクライナの騎士 *Козацьке Братство Лицарі України*』という、ウクライナを中心にロシア以外のCIS各国のコサック諸団体の主要人物の人名録を発刊することも事業の一つである。2014年版に掲載されているのは総数251名、コサック関係者172名、ウクライナ軍・警察関係者52名が含まれている。国境警備庁・軍をはじめ、会社経営者や商店主なども多数掲載されており、コサック人脈を通じたビジネス・モデルの存在が窺える。ここからは、ウクライナのコサック諸団体はロシアのように愛国主義や民族主義の団体というよりは「ウクライナ」という価値観を共有できるのであれば、国籍、民族、出身問わずに受け入れる姿勢が窺える。

4 結語

—ポスト・マイダンとATOにおける民族主義諸勢力の活動—

ユーロ・マイダンの構造は非常に複雑であり、民主勢力と言っても統一性はなく、親欧州派で純粋な民主主義者がいる一方、極右的な反ロシア派も含まれた⁽²⁶⁾。また、「右派セクター」と呼ばれるウルトラ極右集団まで出現した。

(24) ‘Кернесу присвоили звання “героя козацького народу”’, *Тиждень.ua*, 22 березня, 2013 (<http://tyzhden.ua/News/75290>).

(25) ‘Назарбаева нагородили золотой звездой казачества України’, *tengrinews*, 18 апреля 2014. http://tengrinews.kz/kazakhstan_news/nazarbaeva-nagradili-zolotoy-zvezdoy-казачества-украини-253253/

(26) その複雑さについては生田泰浩「現代ウクライナ社会の「分裂」に関する考察」

ウクライナ民族主義の現状

マイダンの構造の一面を単純に図式化すると「民主勢力=新西欧=西ウクライナ=支持政党スヴォボダ=極右」となる。結果として「民主勢力=極右」とも解釈できるが、EUには受け入れがたい図式である。これも現在のウクライナ社会の複雑性を示す一例であると言えよう。

ユーロ・マイダンに対して、コサック諸団体が政治的な立場を表明することはほとんど見られなかった。ウクライナ登録コサックのヘーチマン・シェフチェンコに理由を問えば、「軍と同じでコサックは中立で、ウクライナ国民にのみ仕えるから（スルジュ・ウクラインコム・ナロードゥ）」であり、東西ウクライナのどちらかに肩入れしない姿勢、あるいはウクライナ国民をつなぐ存在となるのが目標とのことであった。⁽²⁷⁾ 確かに2014年2月のウクライナ危機以後、登録コサックへの入団者は増加の一途を辿っている。総数7万人が10万人に達したと発表した。また「キエフ・タラス・シェフチェンコ連隊」⁽²⁸⁾ という名称の軍事訓練を目的とした実働部隊も設立され、UPKの資金でキエフ郊外に訓練キャンプを設置した。その後、ウクライナ国境警備庁の隷下に入り、東ウクライナのATO作戦に従軍した。⁽²⁹⁾

またヘルソン州において、UPKは2014年5月26日の大統領選挙の投票所の警備や、国境警備隊と夜警なども行い、ヘルソン管区司令官ミシャキン中將より感状を贈られている。⁽³⁰⁾ 一方で、ヘーチマン・シェフチェンコは、6月初頭にクリミアへ極秘裏に行き、クリミア支部と今後の対応を検討した。その結果、クリミア支部を「ウクライナロシア登録コサック」という名称に変更し、活動の継続を図るということになった。⁽³¹⁾ つまり、親ロシア派武装勢力に対抗する

（『ロシア・東欧研究』、第43号、2014年）が詳しい。

(27) 2015年1月30日、本人より直接聴取。

(28) 正式名称：Київський козацький полк ім. Т. Шевченка

(29) '5 канал', 18. 6 2014.

(30) 'Україна козацька', № 9-10 (223-224) травень-червень 2014. 'Прикордонники дякують козакам Українського Реєстрового Козацтва на Херсонщині', 2014-05-28.

(31) 2014年9月6日、ウクライナ登録コサック大ラード（キエフ開催）での決定を

ために戦闘訓練をしつつも、ロシアとのコネクション維持も意図した。

本稿では、前半はスヴォボダ、後半はコサック団体を中心に見てきた。そこから浮かび上がるのは、ウクライナの愛国主義や民族主義を受け止めるチャンネルは、今後、どこが成りえるかということである。まず、スヴォボダであるが、マイダンまでは、創設当初のネオナチ的な主張から議会制下での右翼政党へ脱皮しつつあった。しかし、旧来からの民族主義的主張は、ウクライナの社会・政治状況の複雑性が増す中で、目新しさに欠け、支持率は伸びていない。また、最も過激な支持層が右派セクターに流れるなど、支持の取り込みに向けての方向性がまだ見いだせていないのが現状である。スヴォボダ党员のみで編成されたシーチ義勇大隊がウクライナ内務省の隷下で正規軍に近い存在となり、国政政党の立場から法令順守の方針のため、以前のように過激な行動を取りにくくなっている。

次に、ウクライナのコサック組織であるが、本稿で考察したとおり、外国人を受け入れ、CIS圏内でコサック文化を通じた交流を志向するなど、保守勢力ながら国際的で穏健派とも言える。また、旧来のウクライナ民族主義を標榜するスヴォボダ党などとは支持層がまったく重ならないということも分かる。これからの施策次第では、広範で穏健な保守・愛国主義層を取り込む余地があると考えられる。

2015年4月18日、ウクライナ登録コサックからATOに従事した「キエフ・タラス・シェフチェンコ連隊」の兵士のみを対象とした国境警備隊の叙勲式が開かれた。その模様が、「コサックの勇気に対して」との表題で国境警備隊機関紙の1面を飾り、存在感を示している⁽³²⁾。また、ウクライナ愛国主義の受け皿だけではなく、ロシアとの仲介役となる可能性もある。2015年4月20日のイズベスチヤ紙によれば、ドン・コサックのアタマンで前ロシア国家院議員のヴィクトル・バドラツキー・コサック将軍は、ウクライナ登録コサックのヘーチマ

現地で聴取。

(32) ‘Прикордонник України’, № 14 (5460) 10 квітня 2015.

ウクライナ民族主義の現状

ン・シェフチェンコに書簡を送り、ウクライナ西部の民族主義勢力やネオ・ナチと協力しないように要請したことが報じられている。⁽³³⁾そこからは、ウクライナ・ロシア間の仲介者としての役割も期待されているのが分かる。一方、組織としては、現在のウクライナ社会を象徴するような不安定な要素もある。2015年6月現在、兵士の大半がウクライナ登録コサックのメンバーで構成されている義勇兵大隊「トルナード（旋風）」が、展開しているルーハンシク州で密輸品を満載した貨物列車を摘発したところ、逆にウクライナ内務省より解散命令を受け、それに抵抗している。⁽³⁴⁾

東ウクライナにおけるATO作戦が続く中、ウクライナ市民社会と民族主義のねじれはさらに深まっている。スヴォボダの悲願であったウクライナ蜂起軍УПАの国家承認については、皮肉にもスヴォボダが政権を離れた後に、最高会議で認められた。⁽³⁵⁾表面的には、愛国主義がソ連崩壊後もっとも高まった現在、今後、ウクライナ民族主義諸勢力が、どこに自分たちの存在意義を見出せるのか、現在模索中である。

(33) ‘Казачий генерал Водолацкий призвал украинских казаков не сотрудничать с нацистами и бандеровцами’, *Газета Известия*, 20 апреля 2015. <http://izvestia.ru/news/585504#ixzz3eF5pBrkD>

(34) ‘Аваков про справу «Торнадо»: я проти огульного звинувачення на адресу всіх бійців’, *Радіо Свобода*, 26 червня 2015. 本稿執筆時点で、ウクライナ危機の混乱に乗じた政府高官による密輸の黙認が横行しており、それを指摘したことによる不当な解散命令との報道が多い。アバコフ内相はトルナード大隊を一部評価はしている。

(35) Проект Закону про правовий статус та вшанування пам’яті борців за незалежність України у XX столітті「20世紀におけるウクライナ独立の闘士に法的立場と栄誉を授ける法」, (ウクライナ最高会議ウェブサイト; http://wl.cl.rada.gov.ua/pls/zweb2/webproc4_1?pf3511=54689) なお、法案提出者のユリイ・シュヘーヴィチ議員はウクライナ英雄であり、УПАの指導者ロマン・シュヘーヴィチの息子である。

The Real Image of Ukrainian Nationalism: Case study of the Svoboda and Ukrainian Cossacks

Yoshihiko Okabe

Purpose of this article is reveal the current situation of Ukrainian nationalism through political party Svoboda (Freedom) and Ukrainian Cossacks Organization.

After the crisis of Ukraine from February 2014, Russian government and massmedia announced 'The regime of Ukraine is supported far right wings like Svoboda'. After far right fraction lost power by election on October 2014, Russian officials continue to insist same opinion.

But there is nothing analysis through hearing from persons of Svoboda, most of claims were 'impressionism'.

This article included 5 interviews from high level party members of Svoboda. And also 2 Ukrainian Cossacks organization were case studied. Through them, this article will show real image of Ukrainian nationalism now.